★『大阪銀行通信録』（前身誌『銀行報告誌』を含む）は、全国的視野にたつ金融経済の状況をもとに、特に大阪金融市場を中心とする関西の諸地域、及び西日本各地の金融経済の動向を把握できる第一級の資料。東京の『銀行通信録』（現在復刻刊行中）、名古屋の『中央銀行会通信録』（弊社にて復刻刊行中）と共に、日本金融史研究に不可欠の三大重要資料の復刻版である！

——不二出版

監修・解説——作道洋太郎・岡田和喜・高嶋雅明・本間靖夫

大阪銀行通信録

●創刊号（明治23年3月）表紙

（誌名の変遷）『銀行報告誌』第1号（明治23年3月）→第92号（明治30年8月）
『大阪銀行通信録』第1号（明治30年11月）→第540号（昭和17年8月）

◉明治期 全60巻——

体裁等——B5判・上製本・総25、170頁

配本——'91年5月第1回配本開始

本体価格——960、000円（全60巻揃価）

推薦——宮本又次・長幸男・安岡重明・大浦克彦

「天下の台所」―関西経済の研究に資する第一級の基礎資料

――宮本又次・日本学士院会員・大阪大学名誉教授

関西経済はいま発展の新しい時期を迎えている。こうしたとき、明治中期から昭和戦中期に至る五十年余にわたる第一級の金融経済資料『銀行報告誌』ならびに『大阪銀行通信録』が復刻されることは慶賀のかぎりである。

大阪は江戸時代に「天下の台所」として流通・金融センターの役割を果たし、明治以後の経済近代化の過程においても、産業革命の中心地となり、流通組織や金融制度の新しい体系を創り出してきた。

『銀行報告誌』(明治二三年一月～明治三〇年八月)、『大阪銀行通信録』(明治三〇年一一月～昭和一七年八月)には、大阪の動向だけではなく、関西の諸地域についても近代金融市場の形成過程を明らかにしており、さらに西日本各地の状況もつたえている。東京の『銀行通信録』、名古屋の『中央銀行会通信録』と同様に貴重な研究資料である。これらの三つの主要な地域における金融史資料を総合的に研究することによって、近代日本経済の歴史像が明らかにされることになるであろう。

したがって、本資料は関西および西日本の金融情報を中心とした経済資料を収録しており、その資料的価値は高いものということができる。関西経済の明日の課題に対応するためにも、本資料のなかから歴史の経験や教訓を読み取ることができるように思う。大学等研究機関ばかりではなく、金融業界等経済界においても広く利用されることが期待される。

大阪銀行通信録 第一號

大阪銀行集會所設立の來歴

第一國立銀行頭取澁澤榮一氏の首唱に依り明治十一年六月九日第三十二國立銀行に於て在阪の銀行者十八名が相鳩りて社交的の協議會を開きしは卽ち大阪同盟銀行の濫觴にして其以來十有九年間の星霜と共に程々の變遷を經て本年を以て終局したる大阪同盟銀行集會所は九月十六日の總會を以て都會に依り一旦解散することゝなりしより之に代りて銀行當事者が時々相會し互に交誼を厚ふし且は各自營業上の利害得失を講究する一の集會所設立の必要は銀行者一般の希望なれば此希望を充さんお爲め同盟銀行集會所解散後間もなく第一第三第五第三十二三十四第四十二第百三十第百四十八三井三菱鴻池住友帝國商業北濱等の諸銀行は先つ進で發起銀行となり專ら勸誘斡旋の勞を執り遂に發起銀行を合せて總計六十七行の賛成者を得茲に本年十月五日の創立總會を以て當大阪銀行集會所の設立を見るに至れり

一

創立總會

本年十月五日午後第四時より大阪ホテルに於て當銀行集會所の設立に關する協議會を開く會する者五十六行衆望に依り第一銀行支店熊谷辰太郎氏議長席に就き起艸委員より提出せる規程草案を原案とし逐條審議遂に僭正確定せり依て同月十一日に於て更に委員撰擧會を開く可き事を定め全く議事を了りたるは午後八時なりき

二

委員撰擧會

前回の約を履み十一日午后第五時より大阪ホテルに於て委員選擧會を開く會するもの六十四行にして前回の例に倣ひ復た熊谷辰太郎氏を議長に推選し茲に始めて委員選擧の手續に移りしに其選擧せられたる者は

株式會社 第一銀行大阪支店 熊谷辰太郎
株式會社 大阪貯蓄銀行 外山脩造
第百三十國立銀行 松本誠宣
三菱合資會社大阪支店銀行部 江口定條
住友銀行 田邊貞吉

近畿地方の金融市場に関する広汎な統計と情報を提供

――長　幸男・東京外国語大学名誉教授

昭和三六年に完結した『日本金融史資料・明治大正編』全二五巻はその頃の研究者にとって離すことのできない資料庫であった。しかし、個々の銀行や各地域の金融の実態を把握するには充分とはいえない。わが国の金融機構の形成と動態を、ナショナルな視野から包括的に把えることが、編集の主眼であったからである。同『資料』は第六巻を「明治時代の銀行に関する雑誌」にあて、東京銀行集会所機関誌『銀行通信録』を収録し、その(附)として『大阪銀行通信録』を載せている。しかし、前者は、全国にわたる各銀行の動向や金利変動等を編者の方針で「銀行要録」と題して再編し、かつ主だった論説等を選択摘録したものである。後者に至っては、大阪地方の特殊な記事を若干収録したにとどまり、資料としては不充分で、『大阪銀行通信録』の銀行雑誌としての片鱗をうかがうにすぎない。

今日の金融史研究では、各銀行の内部資料による経営分析や、地域の信用ネットワークの分析などが、金融情勢や金融政策の考察と結びつきながら、緻密な作業によって追求されている。本復刻はそのような研究の前線で精励する人々の必要にこたえるものである。

大阪はいうまでもなく幕藩体制下における全国的商品流通の中心であり、大名・商人から庶民にいたる両替・為替・貸借等の信用制度がもっとも発達した地域である。明治以降政治の中枢が東京に移り、公私経済の中心も亦京浜地帯に形成されていったとはいえ、大阪を中心とする近畿一帯が、その伝統的基盤を踏まえて、わが国の金融市場で独自の卓越した地位を占め、近畿型の一大商工業地帯を育成し、近代的な信用制度の展開に重要な役割を果したことは多言を要しない。

したがって、浩瀚な本書の完全復刻は、大阪を中心とした近畿地方の諸銀行・金融市場に関する広汎な統計・情報を提供し、所収の幾多の論説なども夫々の時期の市場解析を助け、従来の研究を一層推進する有力な土台となろう。

第六表(豎)　大阪銀行集會所組合銀行報告

高在現日末月九年四十四治明

銀行名＼項目	現實拂込資本金	積立金	預金 定期	預金 當座	預金 特別預金	預金 諸預金	預金 合計	貸出 貸附	貸出 當座貸越	貸出 割引手形	貸出 合計	有價證券	金銀有高
浪速銀行	4,750,000	2,080,000	7,798,716	2,214,879	2,235,215	975,171	13,223,981	363,255	1,203,536	8,771,119	10,337,910	7,177,462	959,640
三十四銀行	5,000,000	2,110,000	9,515,454	3,894,118	3,053,921	1,361,231	17,824,724	1,223,866	400,099	16,106,988	17,730,953	10,403,373	1,597,659
百三十銀行	3,810,912	185,000	1,738,345	1,751,072	1,470,336	1,790,741	6,750,494	1,297,658	340,098	6,127,710	7,765,466	5,333,833	790,682
山口銀行	1,000,000	1,600,000	6,584,818	4,147,322	5,287,335	2,166,507	18,185,982	462,800	816,036	13,404,293	14,683,129	5,910,321	1,495,636
住友銀行	1,000,000	4,800,000	6,958,916	3,460,347	6,226,429	781,267	17,426,959	1,903	447,318	15,221,084	15,670,305	11,951,956	1,933,597
鴻池銀行	3,000,000	2,000,000	5,455,818	1,295,718	5,818,341	696,714	13,266,591	983,124	491,077	10,105,347	11,579,548	2,335,156	1,534,994
北濱銀行	6,500,000	1,180,000	9,400,683	3,885,051	1,765,315	455,113	15,506,162	589,834	5,193,063	10,413,401	16,196,298	7,500,573	2,149,704
近江銀行	2,000,000	292,336	4,673,178	2,560,482	1,867,434	622,980	9,724,074	31,418	1,381,805	9,750,577	11,163,800	728,149	1,014,432
大阪實業銀行	350,000	65,000	579,515	84,587	68,537	49,314	781,953	280,532	18,212	722,285	1,021,029	81,423	62,542
川上銀行	60,000	86,000	209,611	232,111	252,357	347,691	1,041,770	80,325	81,968	546,934	709,227	238,087	107,307
加島銀行	300,000	740,000	1,536,744	1,446,399	1,567,254	975,705	5,526,102	126,132	172,426	8,083,867	8,382,425	1,364,795	427,021
虎屋銀行	200,000	184,000	766,038	624,711	713,709	287,606	2,392,064	657,032	337,442	799,397	1,793,871	573,193	196,180
富岡銀行	30,000	20,000	160,384	129,842	150,610	……	440,836	74,329	117,563	283,319	475,211	104,380	31,912
尾州銀行	625,000	96,000	106,103	126,325	131,567	55,530	419,525	170,100	275,298	1,152,749	1,598,147	96,050	81,090
大阪貯蓄銀行	100,000	1,100,000	……	……	22,470,333	……	22,470,333	44,000	……	1,333,414	1,377,414	25,684,363	672,896
大阪工商銀行	340,000	17,372	69,832	29,383	41,394	16,265	156,874	39,380	8,890	423,393	471,663	3,222	22,484
西六銀行	70,000	60,000	4,027	81,476	133,100	147,420	366,023	68,321	100,442	395,247	564,010	……	10,602
古市銀行	30,000	29,500	65,696	146,552	270,456	3,165	485,869	180,300	82,276	……	262,576	99,500	162,159
葛城銀行	30,000	22,000	70,231	107,184	161,114	23,668	362,197	45,024	58,260	193,654	296,938	70,419	33,566

◉『大阪銀行通信録』推薦の辞

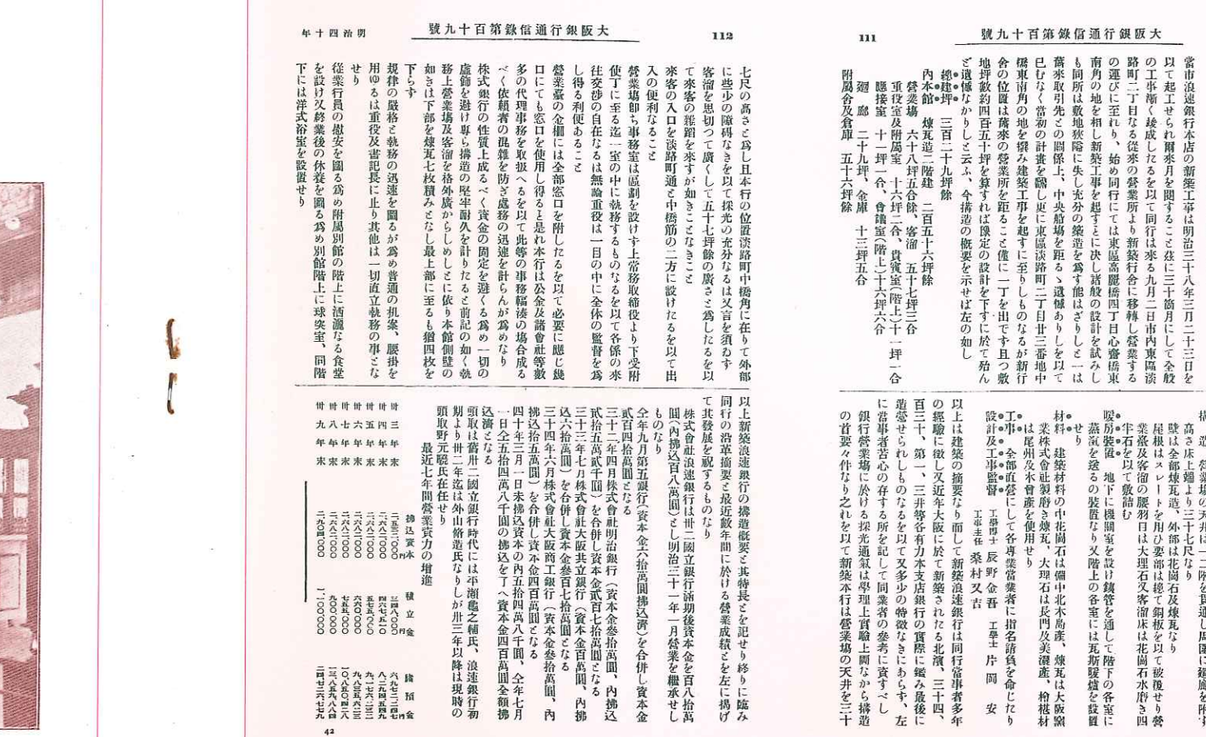
より深化されたレベルでの日本経済発達史の解明に有効

——安岡重明・同志社大学教授

東京の『銀行通信録』、名古屋の『中央銀行会通信録』の刊行と並行して、大阪の『大阪銀行通信録』（その前身誌『銀行報告誌』を含む）が復刻、刊行される。まことに喜ばしいことである。『大阪銀行通信録』の期間は、明治二三年から昭和一七年までの約半世紀であり、それは日本の近代産業の確立・発展期であった。

周知のように関西は古来、政治経済の中心地であり、とりわけ大阪は江戸期には、経済金融の中枢であった。その大阪が明治以降、どのように活動したかを解明することは、重要な課題である。また民間レベルでの日本経済の近代化は大阪の綿糸紡績業が先頭に立って、押し進められた。だから大阪や関西の金融事情の解明は、一層進化されたレベルで日本経済の発達史を再構築するために必要であり、地域内の産業・金融についての情報ばかりでなく、全国的な論説や調査レポートを含んだこの『大阪銀行通信録』の利用は、それを可能にするだろう。

◉内容見本



八月發行　大阪銀行通信録第百十九號　111

内國彙報

浪速銀行の新築落成

（建築の概要及特長）

當市浪速銀行本店の新築工事は明治三十八年三月二十三日を以て起工せられ爾來月を閲すること殆ど三十箇月にして全般の工事漸く竣成しなる以て同行は來る九月二日市内東區淡路町二丁目なる從來の營業所より新築行舍に移轉し營業する運に至れり、始め同行にては東區高麗橋四丁目心齋橋東南角の地を相し新築工事を起すと共に決議般の設計を試みしも同所は敷地狹隘に失し充分の築造を爲す能はざりしと一は舊來取引先との關係上、中央船場を距ゝ遠慮ありしを以て已むなく當初の計畫を醵し更に東區淡路町二丁目廿三番地中櫛東南角の地を撰み建築工事を起すに至りしものなるが新行舍の位置は舊來の營業所を距ること僅に一丁を出でず且つ敷地坪數四百五十坪を算すれば豫定の設計を下すに於て殆んど遺憾なかりしと云ふ、今構造の概要を示せば左の如し

總建坪・三百一十九坪餘
内訳・本館・煉瓦造二階建　二百五十六坪餘
營業場　六十八坪五合餘、客溜　五十七坪三合
重役室及附屬室　十一坪二合、貴賓室（階上）十一坪一合
應接室　十一坪一合、會議室（階上）十六坪六合
廻廊　二十九坪、金庫　十三坪五合
附屬合及倉庫　五十六坪餘

渡廊・總下車賃場　十七坪餘
基礎・地面平均二十尺邊下げ杭抗を打込みコンクリート及煉瓦を以て構成せり
軒高・地面より四十一尺、隅塔避雷針尖迄七十二尺餘に及べり
構造・營業場の天井は一二階を貫通し周圍に廻廊を附す高さ床上獨より三十七尺なり
壁は全部瓦造、外部は花崗石及煉瓦なり
尾根はスレートを用ひ要部は穩て銅板を以て被覆せり營業室及客溜の腰羽目は大理石及客溜床は花崗石水磨き四壁牢石を以て敷詰び
暖房・裝置・地下に機關室を設け鑄管を通じて階下の各室に蒸氣を送るの裝置なり又階上の各室には瓦斯疑爐を設置せり
材料・建築材料の中花崗石は備中北木島産、煉瓦は大阪窯業株式會社製磨き煉瓦、大理石は長門及美濃産、檜板材は尾州久木曾産を使用せり
工事・工事・全部營業にして各專門業者に指名請負を命じたり
設計及工事監督・工部大学校出身　辰野金吾　工學士　片岡安
工部大学校出身　桑村又吉

以上は建築の概要なり而して新築浪速銀行は同行營事者多年の經驗に徴し又近年大阪に於て新築されたる北濱、三十四、百三十、第一、三井等各有力本支店銀行の實際に鑑み最後に遺憾せられしものなるを以て多少の特徴なきにあらず、左に當事者苦心の存する所を記して同業者の參考に資すべし

銀行營業場に於ける採光通氣は學理上實驗上間なから構造の首要々件なり之れを以て新築本行は營業場の天井を三十七尺の高さと爲し且本行の位置淡路町中橋角に在りて外部に些少の障碍なきを以て採光の充分なる又言を須ちず客溜を思切つて廣くして五十七坪餘の廣さと爲したるを以て來客の逕路を來すが如きことなきこと入の便利なること

營業場卸ち事務室は區劃を設け十上常務取締役より下受附使丁に至る迄一室の中に執務するものなるを以て各係の來往交渉の自在なるは無論重役は一目の中に全体の監督を爲し得る利便あること

營業臺の金櫃には全部窓口を附したるを以て必要に應じ幾口にても窓口を使用し得ると是れ本行は公金及諸會社等數多の代理事務を取扱へるを以て此等の事務輻湊の場合成るべく依頼者の迷惑を防ぎ處務の迅速を計らんが爲め一切株式銀行の性質上成るべく費金の固定を避くる爲め一切の虚飾を避け專ら構造の堅牢耐久を計りたると前記の如く執務上營業場及客溜を格外廣くしまして依り本館側壁の如きは下部を煉瓦七枚積みとなし最上部に至るも猶四枚を下らず

規律の厳格と執務の迅速を圖るが爲め普通の扨柒、扉掛を用ゆるは重役及書記長に止り其他は一切直立執務の事となせり

從業行員の慰安を圖る爲の附屬別館の階上に涼亭なる食堂を設け又終業後の休養を圖る爲め別館階上に球突室、同階下には洋式浴室を設置せり

以上新築浪速銀行の構造概要と其特長とを記せり終りに臨み同行の沿革摘要と最近數年間に於ける營業成績とを左に掲げて其發展を觀するものなり

株式會社浪速銀行は世一國立銀行條例後資本金を百八拾萬圓（内拂込百八萬圓）として明治三十一年一月營業を繼承せしものなり

仝年九月第五銀行（資本金六拾萬圓拂込濟）を合併し資本金貳百四拾萬圓となる

三十二年四月株式會社明治銀行（資本金參拾萬圓、内拂込貳拾五萬貳千圓）を合併し資本金貳百七拾萬圓となる

三十三年七月株式會社大阪共立銀行（資本金百萬圓）内拂込六拾萬圓）を合併し資本金參百七拾萬圓となる

三十四年六月株式會社大阪商工銀行（資本金參拾萬圓、内拂込拾五萬圓）を合併し資本金四百萬圓となる

四十年三月一日朱拂込資本金四百萬圓となる

仝年七月一日仝年五拾四萬八千圓の拂込を了へ資本金四百萬圓全額拂込濟となる

須取は舊用二國立銀行時代には平瀬龜之輔氏、浪速銀行初期より世二年迄は外山脩造氏なりしが世三年以降は現時の頭取野元晒氏在任せり

最近七年間營業資力の增進

	拂込資本	積立金	預金
明治三十年末	二百八萬圓	四万七千三百円	八百九十三万三千円
明治四十年末	二百八萬圓	四万七千三百円	四百七十万三千円
明治四十五年末	二百八萬圓	七百五万円	七百五十万三千円
大正六年末	二百八萬圓	六百五万円	九百八十五万三千円
大正七年末	二百八萬圓	七百五万円	九百八十五万三千円
大正八年末	二百八萬圓	七百五万円	九百八十五万三千円
大正九年末	二百八萬圓	七百五万円	一千〇百〇五万三千円
大正十年末	二百八萬圓	七百五万円	一千〇百〇五万三千円

42

日本金融経済史研究の発展に寄与することを期待して

——大浦克彦・大阪銀行協会専務理事

この度、我が国金融史研究の代表者、作道洋太郎、岡田和喜、高嶋雅明、本間靖夫の四氏の監修・解説により、大阪銀行協会の前身である大阪同盟銀行集会所（のちに大阪銀行集会所に改組）の編集になる、『銀行報告誌』並びに『大阪銀行通信録』が復刻出版されることは、まことに時宜をえたものといえよう。

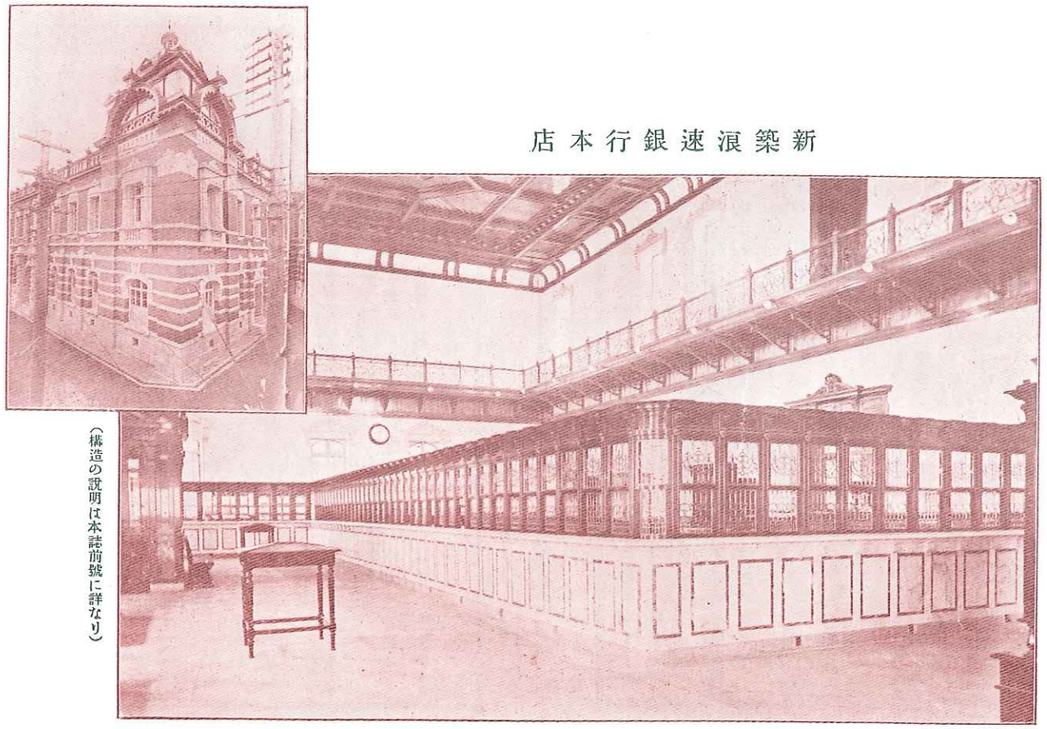
昔時より、天下の台所として栄えた商都大阪は、手形の流通も旺んで、明治一二年には全国に先駆けて手形交換所が設立され、また有力銀行による金利協定を成立させるなど、日本銀行大阪支店を中心に、在阪有力銀行の活動は独自の金融市場を形成し、大阪を中心とする関西地域の経済・金融動向は、全国的にみても極めて重要な地位を占めていた。

大阪同盟銀行集会所編『銀行報告誌』は明治二三年三月に創刊され九二号まで発刊、明治三〇年一一月より大阪銀行集会所編『大阪銀行通信録』と改題、その後金融団体統制令によって廃刊を余儀なくされるに至った昭和一七年八月第五四〇号まで刊行された。両誌合わせて六三二号（二二五号は欠番のため）を数える。

『銀行報告誌』並びに『大阪銀行通信録』には、地域内の産業、金融についての情報が細事に亘り記載されているだけでなく、論説、著名人の演説のほか、調査レポートには全国レベルの財政・経済・金融に関するものが少なくない。

本資料の活用を通じて関西金融経済史ひいては近代日本金融経済史の研究が一層深められることを期待したい。

この度の復刻刊行には、多大の労力と期間が予想されるが、本資料の斯界における意義を了とされ、各位のご理解とご支援とをお願いする次第である。



（構造の説明は本誌前號に詳なり）

例言

一此報告誌ハ銀行營業上ニ關切ナル事件ヲ揭載スルモノナリ

一此報告誌ノ發行ハ毎月一回ト定メ揭載事件ノ增加スル時ハ隨テ數次增刊スヘシ

一此報告誌ハ發賣品ニアラサルヲ以テ同盟銀行ノ外漫ニ世間ニ頒布セサルモノナリ

一本誌報告表銀行名稱中第何國立銀行又ハ何某本支店ト記入スヘキヲ國立ハ第何本支店私立ハ何某本支店ト省略ス

同業者及其他一般ニ十分ノ用意ナシタル精ニヤ稍ヤ緩ヲ告シモ十月以來引續キノ金融ツマリヲ受ケ概シテ必逼ニテ貸付割引日歩モ四錢ヨリ五錢マデノ間ヲ往來セリ商況ハ一般ニ不景氣ニシテ誠ニ憫然ノ有樣ナリ

○兵庫通信　金融繁劇商況不變

○和歌山通信　金融ハ前月ヲ承テ漸次繁劇ヲ覺ヘリ殊ニ年末ニ際セハ一層金利モ上騰スルナラントト豫想セシニ差シタル變動モナク日歩四五錢ヲ往來シテ暮年セリ商況ニ於テモ例年ニ比シ概シテ不景氣ト言ハザルヲ得ス

○那山通信　當地金融ハ前月以來引續キ繁忙ニシテ必逼ヲ覺ユ商況ノ如キハ稍沈靜ニシテ不振ノ傾向アリ

○彦根通信　當地一般金融ノ景況ハ客月ヨリ引續キ必逼ノ儘經過セシカ年末ノ加減ニテ一層引締ノ勢ナリ商況ハ頗ル沉靜ニシテ尙不振ノ傾向アリ

第一國立銀行大阪支店
第三國立銀行大阪支店
第五國立銀行大阪支店
第九國立銀行大阪支店
第十七國立銀行大阪支店
第二十二國立銀行大阪支店
第三十八國立銀行大阪支店
第八十九國立銀行大阪支店
第百四十七國立銀行大阪支店
三井銀行大阪分店
合計

貸	借	貸	借	貸	借	貸	借	貸	借	貸	借	貸	借	貸	借
一八、二五八	一四七	二、二七一	一八一四五	七、三〇三	五九八	二、二八九、七七六	五九八	五、六〇二	一、六六	一八、二五八	一四七	二、二七一	一八一四五	七、三〇三	五九八
二〇九、八八七	九〇四	二、一八八、九五五	〇〇六	四、四九五	四、四九五	二、三九八、八四二	九〇二	一、三九八、八四二	九〇二	二〇九、八八七	九〇四	二、一八八、九五五	〇〇六	四、四九五	四、四九五
五二、九一二	三〇七	二四五、〇六六	二二二	九八二	二二二	二九七、九七八	七二九	二九七、九七八	七二九	五二、九一二	三〇七	二四五、〇六六	二二二	九八二	二二二
二四、一二九	二六六	三六八、八五二	六三八	一、一九〇	一、一九〇	二、六六二、六四二	二、六六二	二、六六二、六四二	二、六六二	二四、一二九	二六六	三六八、八五二	六三八	一、一九〇	一、一九〇
四五、八八三	七四二	七一、三七〇	七四二	八九三	八九三	二三九、〇四四	一七四	二三九、〇四四	一七四	四五、八八三	七四二	七一、三七〇	七四二	八九三	八九三
三二〇、六二二	一九〇	四五、一五七	六七五	二、二七一	二、二七一	二〇六、〇七四	二八三	二〇六、〇七四	二八三	三二〇、六二二	一九〇	四五、一五七	六七五	二、二七一	二、二七一
五八五、三二二	三七一	三四八、四〇四	三七四	一、九〇二	一、九〇二	五五七、五四六	三〇八	五五七、五四六	三〇八	五八五、三二二	三七一	三四八、四〇四	三七四	一、九〇二	一、九〇二
二、八九三、四二八	〇〇一	二、八九三、四二八	〇〇一	二、三九〇	二、三九〇	一、一二六、六四二	一、一二六	一、一二六、六四二	一、一二六	二、八九三、四二八	〇〇一	二、八九三、四二八	〇〇一	二、三九〇	二、三九〇
一九、〇七七、八二四	二五五	六三、一八六	六三、一八六	八、八四三	八、八四三	一九、〇七七、八二四	二五五	一九、〇七七、八二四	二五五	六三、一八六	六三、一八六	八、八四三	八、八四三	一九、〇七七、八二四	二五五

○各地金融及商況

○大阪府下　十二月中金融ノ景況ハ前月末頻繁ヲ現シタルニモ不拘稍緩慢ノ傾キアリ然シテ月末一時繁忙ヲ告ケタリト雖モ概シテ圓滑ニ通過セリ是レ蓋シ各自毎年末ノ切逼ニ恐怖シ準備ヲ怠ラザリシト日本銀行カ市場ノ景況ニ應シ貸出金ヲ調理セラレシモノ其大ナル原因ト云フベシ商況ニ至ツテハ米價ハ依然高價ヲ保チシモ全体ノ商情萎靡不振ノ有樣ナリシ

○神戸通信　金融ハ十二月ニ入リナバ非常ノ必迫ヲ來タスナラントト

○尾道通信　金融ハ前月ニ比シテハ少シク引弛ミタル姿ナレトモ大体甚タ繁劇ナリ諸物價ハ總テ春上ケノ見込ニテ差扣ヘノ傾キアルト陰暦十二月ニ閏月アルトニ因ルカ商況至テ平穩ナリ

○高梁通信　當地金融ハ漸次繁忙ニシテ更ニ緩慢ノ色ヲ見ス是レ商況ノ活潑ニシテ資金ノ缺乏ニ基スルカ敢テ然ラス已ニ歲晚決算ノ季ニ近ツキタルニ因ルモノナリ又商況ハ概チ不活潑ニシテ米價ハ著ルシキ昇降ナシ加之ルニ當地物產ノ第一位ヲ占メシ刻煙草ハ粗製ノ故チ以テ全ク販路ヲ失ヒ爲メニ一層ノ不景氣ヲ添ヘタリ

○高知通信　當地十二月中ノ金融ハ年尾ニ際シ一層繁忙ヲ來シ日歩ハ三錢五厘ヨリ五錢ノ間ヲ昇降セリ而シテ諸物價ノ中米價ハ前月ニ比シ異動ナク其他紙類茹砂糖等ノ如キハ概シテ低落ノ姿ニ赴ケリ特リ樟腦ハ依然トシテ高價ヲ維持セリ

○京都通信　商況ハ沉靜ニシテ活潑ナラス物品捌方悪敷シテ取引甚少ナク市ノ騷擾タル西陣ノ如キ閏暦ノ加減カ地方金廻リ悪敷且正

大阪銀行通信録（明治期）全60巻

◉復刻版概要

体裁等――B5判・上製・総25、170頁
本体価格――全60巻960、000円
（継続刊行予定）
大正期 全61巻 976、000円 '95年4月～'98年1月
昭和期 全66巻1、056、000円 '98年4月～'02年12月

監修・解説
作道洋太郎・大阪大学名誉教授
岡田和喜・日本大学教授
高嶋雅明・和歌山大学教授
本間靖夫・千葉商科大学教授
（解説は適宜、巻頭に付きます）

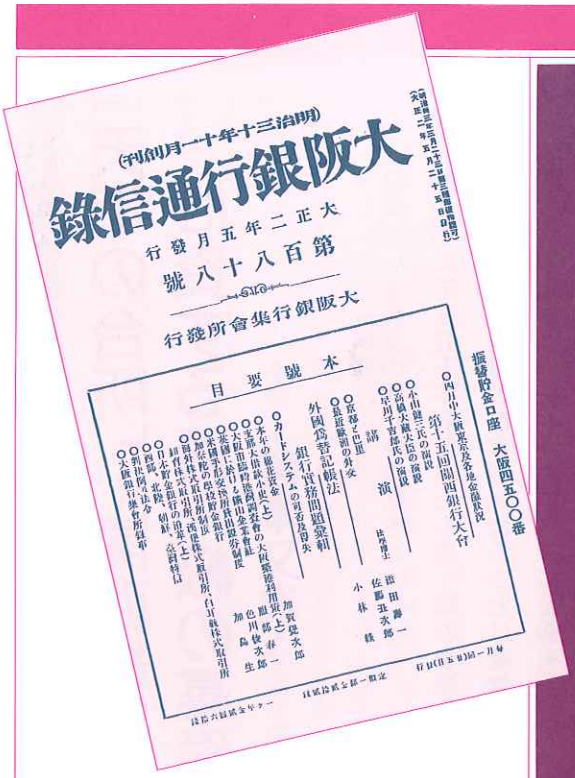
◉配本予定

配本	復刻版巻数	原本収録年月	頁数	刊行年月	本体価格	配本年度	年度揃価
第1回	第1巻～第5巻	明23・3～明27・12	2、530	'91年5月	80、000円	'91年度分	240、000円
第2回	第6巻～第9巻	明28・1～明30・8	2、010	'91年9月	64、000円		
第3回	第10巻～第15巻	明30・11～明33・8	2、046	'92年1月	96、000円		
第4回	第16巻～第20巻	明33・9～明34・12	1、968	'92年5月	80、000円	'92年度分	240、000円
第5回	第21巻～第25巻	明35・1～明36・4	2、246	'92年9月	80、000円		
第6回	第26巻～第30巻	明36・5～明37・8	1、868	'93年1月	80、000円		
第7回	第31巻～第35巻	明37・9～明39・5	2、026	'93年5月	80、000円	'93年度分	240、000円
第8回	第36巻～第40巻	明39・6～明40・12	2、180	'93年9月	80、000円		
第9回	第41巻～第45巻	明41・1～明42・3	1、942	'94年1月	80、000円		
第10回	第46巻～第50巻	明42・4～明43・6	2、064	'94年5月	80、000円	'94年度分	240、000円
第11回	第51巻～第55巻	明43・7～明44・9	2、158	'94年9月	80、000円		
第12回	第56巻～第60巻	明44・10～大1・12	2、098	'95年1月	80、000円		

本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

不二出版
東京都文京区向丘一―二―一二
TEL ○三―三八一二―四四三三
FAX ○三―三八一二―四四六四
振替〈東京〉六―九四〇八四

※弊社は注文制です。お近くの書店へご注文ください。



大阪銀行通信錄

★『大阪銀行通信録』（前身誌『銀行報告誌』を含む）は、全国的視野にたつ金融経済の状況をもとに、特に大阪金融市場を中心とする関西の諸地域、及び西日本各地の金融経済の動向を把握できる第一級の資料。東京の『銀行通信録』（復刻刊行済）、名古屋の『中央銀行会通信録』（弊社にて復刻刊行中）と共に、日本金融史研究に不可欠の三大重要資料の復刻版である！

——不二出版

監修・解説——作道洋太郎・岡田和喜・高嶋雅明・本間靖夫

（誌名の変遷）『銀行報告誌』第1号（明治23年3月）→第92号（明治30年8月）
『大阪銀行通信録』第1号（明治30年11月）→第540号（昭和17年8月）

◉大正期 全55巻——

体裁等——B5判・上製本・総29、798頁
配本——'95年5月→'98年9月・11回配本
本体価格——990、000円（全55巻揃価）

推薦——宮本又次・長幸男・安岡重明・大浦克彦

「天下の台所」――関西経済の研究に資する第一級の基礎資料

――宮本又次・日本学士院会員・大阪大学名誉教授・故人

関西経済はいま発展の新しい時期を迎えている。こうしたとき、明治中期から昭和戦中期に至る五十年余にわたる第一級の金融経済資料『銀行報告誌』ならびに『大阪銀行通信録』が復刻されることは慶賀のかぎりである。

大阪は江戸時代に「天下の台所」として流通・金融センターの役割を果たし、明治以後の経済近代化の過程においても、産業革命の中心地となり、流通組織や金融制度の新しい体系を創り出してきた。

『銀行報告誌』(明治二三年三月～明治三〇年八月)、『大阪銀行通信録』(明治三〇年一一月～昭和一七年八月)には、大阪の動向だけではなく、関西の諸地域についても近代金融市場の形成過程を明らかにしており、さらに西日本各地の状況もつたえている。東京の『銀行通信録』、名古屋の『中央銀行会通信録』と同様に貴重な研究資料である。これらの三つの主要な地域における金融史資料を総合的に研究することによって、近代日本経済の歴史像が明らかにされることになるであろう。

したがって、本資料は関西および西日本の金融情報を中心とした経済資料を収録しており、その資料的価値は高いものということができる。関西経済の明日の課題に対応するためにも、本資料のなかから歴史の経験や教訓を読み取ることができるように思う。大学等研究機関ばかりではなく、金融業界等経済界においても広く利用されることが期待される。

近畿地方の金融市場に関する広汎な統計と情報を提供

――長　幸男・東京外国語大学名誉教授

昭和三六年に完結した『日本金融史資料・明治大正編』全二五巻はその頃の研究者にとって離すことのできない資料庫であった。しかし、個々の銀行や各地域の金融の実態を把握するには充分とはいえない。わが国の金融機構の形成と動態を、ナショナルな視野から包括的に把えることが、編集の主眼であったからである。同『資料』は第六巻を「明治時代の銀行に関する雑誌」にあて、東京銀行集会所機関誌『銀行通信録』を収録し、その(附)として『大阪銀行通信録』を載せている。しかし、前者は、全国にわたる各銀行の動向や金利変動等を編者の方針で「銀行要録」と題して再編し、かつ主だった論説等を選択摘録したものである。後者に至っては、大阪地方の特殊な記事を若干収録したにとどまり、資料としては不充分で、『大阪銀行通信録』の銀行雑誌としての片鱗をうかがうにすぎない。

今日の金融史研究では、各銀行の内部資料による経営分析や、地域の信用ネットワークの分析などが、金融情勢や金融政策の考察と結びつきながら、緻密な作業によって追求されている。本復刻はそのような研究の前線で精励する人々の必要にこたえるものである。

大阪はいうまでもなく幕藩体制下における全国的商品流通の中心であり、大名・商人から庶民にいたる両替・為替・貸借等の信用制度がもっとも発達した地域である。明治以降政治の中枢が東京に移り、公私経済の中心も亦京浜地帯に形成されていったとはいえ、大阪を中心とする近畿一帯が、その伝統的基盤を踏まえて、わが国の金融市場で独自の卓越した地位を占め、近畿型の一大商工業地帯を育成し、近代的な信用制度の展開に重要な役割を果したことは多言を要しない。

したがって、浩瀚な本書の完全復刻は、大阪を中心とした近畿地方の諸銀行・金融市場に関する広汎な統計・情報を提供し、所収の幾多の論説なども夫々の時期の市場解析を助け、従来の研究を一層推進する有力な土台となろう。

大阪銀行通信録　第一號

大阪銀行集會所設立の來歴

第一國立銀行頭取澁澤榮一氏の音唱に依り明治十一年六月九日第三十二國立銀行に於て在阪の銀行者十八名が相爲りて社交的の協議會を開きしは卽ち大阪同盟銀行の濫觴にして其以來十有九年間の星霜と共に程々の變遷を經て本年まで繼續したる大阪同盟銀行集會所は九月十六日の總會を以て都合に依り一旦解散することゝなりしより之に代りて銀行當事者が時々相會し互に交誼を厚ふし且は各自營業上の利害得失を講究する一の集會所設立の必要は銀行者一般の希望なれば此希望を充さんが爲め同盟銀行集會所解散後間もなく第一第三第五第三十二三十四第四十二第百三十第百四十八三井三菱鴻池住友帝國商業北濱等の諸銀行は先つ進んで發起銀行となり專ら勸誘斡旋の勞を執り遂に發起銀行を合せて總計六十七行の賛成者を得茲に本年十月五日の創立總會を以て當大阪銀行集會所の設立を見るに至れり

創立總會

一

本年十月五日午後第四時より大阪ホテルに於て當銀行集會所の設立に關する協議會を開く會する者五十六行衆望に依り第一銀行支店熊谷辰太郎氏議長席に跳き起ち委員より提出せる規程草案を原案とし逐條審議遂に僉正確定せり依て同月十一日に於て更に委員撰擧會を開く可き事を定め全く議事を了りたるは午後八時なりき

委員撰擧會

前回の約を履み十一日午后第五時より大阪ホテルに於て委員選擧會を開く會するもの六十四行にして前回の例に倣ひ復た熊谷辰太郎氏を議長に推選し茲に始めて委員選擧の手續に移りしに其選擧せられたる者は

株式會社第一銀行大阪支店　熊谷辰太郎
株式會社大阪貯蓄銀行外山脩造
第百三十國立銀行松本誠亘
三菱合資會社大阪支店銀行部江口定條
住友銀行田邊貞吉

二

大阪商品相場

大正二年一月一日～一月十日

品名	北久太三	黒川商店
洋釘	二一九	二一七
亞鉛板	一〇一	一〇〇
棉花	一四九	一四八
紡績絲	一五一	一五〇
染絲	一四七	一四三
▲持合(るもの(十七種)		
白米	一八九	硝子板
綿安	二五〇	安賀毋尼
		タオル
		毛斯綸
		廊苧
▲下落せるもの(二十種)		
		茶
		鶏卵
		錫
		革皮
		白木綿
		生金巾
		瓦斯絲
		生絲
		羽二縮緬
古金銀(百兩)	二〇三四・〇〇	二〇三四・〇〇
同(長金)	一一四七・〇〇	一一四七・〇〇
同(文金)	九九八・〇〇	九九八・〇〇
同(草字金)	八六六・〇〇	八六六・〇〇
同(眞保一分銀)	一三一・五〇	一三一・五〇
同(新古銀)	一三一・五〇	一三一・五〇
同(純金)	一三一・五〇	一三一・五〇
同(舊百匁)	九四・〇〇	九四・〇〇
足袋一等車	中之島二	大阪穀物商組合
同一等	二六四	二六四
同一等	二六〇	二六〇
水三等	二三八	二三八
同三等	二六四	二六四
同三等	二六四	二六四
白木綿(一反)	備後町二	和田商店
伊勢松島	三六〇	三六〇
泉州老松	三五五	三五五
豫州松島	三五五	三五五
逢島	三五五	三五五
小麥粉(正味十五貫入一叺)	益田商店	
別極上	七・〇〇	七・〇〇
玉上	六・九〇	六・九〇
一上	六・八〇	六・八〇
三等	五・五〇	五・五〇
二等	四・九〇	四・九〇
大等	四・五〇	四・五〇
雑穀(一石)	中之島三	大阪穀物商組合
肥後大豆	二一・三〇	二一・三〇
秋田大豆	一〇・四〇	一〇・四〇
牛莊大豆	一〇・四〇	一〇・四〇
北海小豆	一七・八〇	一七・八〇
羽二重縮緬上	七・八〇	七・八〇
同下	六・二〇	六・二〇
同中	七・〇〇	七・〇〇
同上	四・九〇	四・九〇
同下	一〇・六〇	一〇・六〇
同中	九・九〇	九・九〇
洋反物(一疋)	本町三	
晒生地モスリン	二・三五	
素生地モスリン	二・三五	
綿朱子淺黄狸(三十疋一反)	一〇・一〇〇	
黒洋天青茨扇(三十五疋一反)	一六・〇〇〇	
縮緬羽二重(練目廻百匁)	本町四	
濱縮緬上	七・八〇	
同中	七・〇〇	
同下	六・二〇	
丹後縮緬上	七・〇〇	
同中	六・二〇	
同下	四・九〇	
白羽二重上	一〇・六〇	
同中	九・九〇	
同下	九・三〇	
羅紗(大巾一疋)	瓦町四	
三番軍鑑絨	一・〇〇〇	
二番(同)	一・四七五	
黒厚絨	一・五七五	
縞メルトン	一・四〇〇	
紡績綿(十貫)	松島二	
帝印	一・三〇	
洋印	一・三〇	
陸印	一〇・九〇	
上印	八・九〇	
ウイス油	五・九〇	
々一等	三・九〇	
紡績糸(四十玉)	南久太二	
鐘淵	一・五六・五〇	
同右	一・五一・〇〇	
戎左	一・五一・五〇	
三馬十六手	一・七九・〇〇	
雄子四十二手	二・〇五・〇〇	
双手左三十手	一・七九・〇〇	
紫鳳凰	安土町二	
白鳳凰	三九四・〇〇	
六八十手	二九四・〇〇	

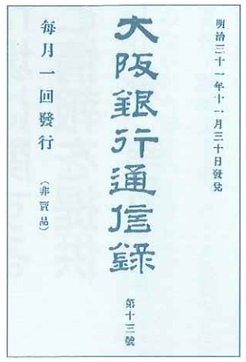
◉『大阪銀行通信録』推薦の辞

より深化されたレベルでの日本経済発達史の解明に有効

——安岡重明・同志社大学教授

東京の『銀行通信録』、名古屋の『中央銀行会通信録』の刊行と並行して、大阪の『大阪銀行通信録』（その前身誌『銀行報告誌』を含む）が復刻、刊行される。まことに喜ばしいことである。『大阪銀行通信録』の期間は、明治二三年から昭和一七年までの約半世紀であり、それは日本の近代産業の確立・発展期であった。

周知のように関西は古来、政治経済の中心地であり、とりわけ大阪は江戸期には、経済金融の中枢であった。その大阪が明治以降、どのように活動したかを解明することは、重要な課題である。また民間レベルでの日本経済の近代化は大阪の綿糸紡績業が先頭に立って、押し進められた。だから大阪や関西の金融事情の解明は、一層進化されたレベルで日本経済の発達史を再構築するために必要であり、地域内の産業・金融についての情報ばかりでなく、全国的な論説や調査レポートを含んだこの『大阪銀行通信録』の利用は、それを可能にするだろう。



◉内容見本（縮小しています）

大阪銀行通信録第百八十八號　393

大阪銀行通信録

第百八十八號

大正二年五月發行

大阪金融市場（大正二年四月）

一年中最も多額の國税納期に當る三月の後を受けたる本月は其巨額の徴收額を月初に於て國庫に移納せらるべき時偖も棉花資金需要旺盛の期に際せるこゝと商番相挟て頗る緊慌を告ぐるを例とせるが殊に本年は春來米價の頓挫に農家の手持米賣揚を誘致したるやの模様あり又地方に依りては昨年の米作楽外不良なりしあり自然是等地方よりの資金回收著だ思はしからずして市場は豫期以上の緊縮を呈したり今之れを再叙するに去月末の日銀支店貸出千二百餘萬圓は越月と共に地方より去月末國庫見せ金として流出したるもの及び國税引納資金の漸次回返せられたるに依り第一週（五日）には既に五百四十萬圓に減じたれど地方よりの回收は概して遅々たるの姿にして市況は月初と雖も緊縮の狀を脱せず金利も無條件コール一錢七厘半、商業手形歩低一錢八厘當を唱へ先月末に比し僅に五毛方の引緩みを見たるのみなりしが、第二週に入りては國税の移納漸く多きに棉花手形の出廻り亦盛なるが爲め市場は再び緊縮の度を増しコール及割引歩合共に五毛方引締り而もコールの如き手極めて穏なりが爲め日銀支店貸出高は少しも減せず此土曜日（十二日）に五百七十七萬圓に上り前週末よりも増加せるのみならず此外去月末弗々實行たる當月月渡鐵道證券の日々賣戻さるゝものの既に四百萬圓に達して金殘高の如き二十萬圓に滿たざる少額に減じたればコールは無條件一錢八厘乃至八厘五毛、商業手形は歩低一錢八厘乃至一錢九厘を唱へ氣配頗る强し、第三週には十四日鐵道證券二千五百萬圓の償還あり當地償還高百四十萬圓なりしが之れに代るべき大蔵證券六月十三日期日歩一錢六厘にて二千萬圓の發行あり去月發行の分をも合して三百餘萬圓の實行を見たれば未だ之れを以て直ちに足らず唯國税の移納殆と終了を告げたるが爲め稍々小康を呈してコールの出手亦ゆるきにあらず日銀支店貸出も少額ながら減少の傾向を示し十七日には三百五十八萬圓に減ぜれば是れ本月の最低殘高とす、此時巴里に於て鐵道會計に關する五分利付國庫債券二億法發行案月初旬愛渡との報傳はしが市場には外資の流入に因る前途の緩慢を憂ふるの雰囲気に陥り尋で英國銀行金利引下の入電あり斯くて市場は暫し小康の裡に推移しコールは無條件一錢八厘乃至八厘半、月越一錢九厘乃至九厘半を唱へ土曜日（十九日）日銀帳尻は貸出四百七十五萬圓預金五十一萬圓を殘し、第四週に入りて棉花資金を除きては著しき資金の移動を見ず月の前半に比しては稍々静穏に傾過したれど唯月末に迫るに從ひ金利は徐々に强含みの氣配を示しコールは月越一錢九厘半乃至二錢を唱へ商業手形も一錢九厘半を最低とするに至り此土曜日（二十六日）日銀帳尻は貸出六百五十萬圓に増し預金は五十萬圓を殘したり、而して政府は近く外資の流入に因り漸る内地金融市場の影響を調整せんが爲め五分利付短期割引證券の発行案公債三千萬圓を米月募集の旨發表す

394　大阪銀行通信録第百八十八號

第五週には開始季に當る月末の迫れるこゝと雖ども市場繁忙を告げ日銀支店貸出は二十八日八百五十萬圓に株式受渡當日は更に千八十八萬圓に而して來月末には千百八十二萬圓と逐日増加し此外米月初期限の大蔵證券實戻も相當巨額に上りて頗る繁忙を呈し月を終りたり、而して本月中の日銀支店帳尻を見るに其貸出の常に四五百萬圓以上に上り居たるも昨年來以來見ざる處なれど其預金殘高の本月の如く少額なりしは實に近年其比を見ざる處にして二百萬圓に逐したる日なく最高百八十一萬圓（二十三日）最低十九萬八千圓（十二日）にして營業日數の半は百萬圓以下の殘高を有せしに過ぎず其平均百三萬圓たりしを見るも如何に手許薄なりしかを知るべし

（一）大阪銀行集會所組合銀行平均金利

貸附日歩	前年四月	前月	大正二年四月
割引日歩	一銭九厘五毛	二銭八厘	二銭六厘
當座貸越日歩	一銭七厘四	一銭七厘	一銭七厘
當座預金日歩	一銭九厘〇	一銭〇	一銭〇
定期預金年利	五分七厘〇	六分〇厘〇	六分〇厘〇

（二）日本銀行大阪支店週末勘定

各週末及月末日	貸出總額	預金總額
大正二年四月五日	五六七三〇一	二六一〇二七
同　十二日	五七七四〇九二	五四一一九四
同　十九日	四七五九三九七	五四八七七六
同　廿六日	六五二一五五六	八七七一三五
同　月末日	二八二二一八五	二七〇七七八八
前年四月末日	五四八七九八六	五〇四八八四五

（三）大阪手形交換所組合銀行週報

各週末日	諸預金	諸貸金	金銀有高
大正二年四月五日	一四一〇二六一四四	一一二五三六四四	一一二五三六四四
同　十二日	一四八八六六一二四	一一二八八七五四	一一二八八七五四
同　十九日	一四九八六一一四〇	一一二四九〇三七	一一二四九〇三七
同　廿六日	一四九一四〇三一	一一二五一四五六	一一二五一四五六
前年同月廿七日	一四九一四〇三一	一一八八五二〇四	一一七七五二〇四

（四）大阪銀行集會所組合銀行月報

	前年四月末	前月末	大正二年四月末
諸預金	一〇一五四八〇四四	一〇七四八〇四四	一〇六八五〇一四八
諸貸金	一〇四〇四三一四五	一〇四一四一九七七	一〇三九五一一八〇
金銀有高	一一二六〇三三一四五	一一二六〇三一一四	一一〇三〇三一一四

東京金融市場（大正二年四月）

去月末には普通月末決濟資金の外更に國庫金檢査の見せ金準備の要ありて相應に資金の需要ありしと雖も是より先き大蔵省證券鐵道證券等の借換られたるものを除くも尚資金の散出せられたるもの巨額に上り市況稍々康の大勢を以て經過し來りしかば月の四日早くも日本銀行樣尻に於て登行餘元二百萬圓を現出するに至り、而して金利も爲めに駒か低落を告げコールは日歩一錢五厘乃至一錢七八厘の間を往來し割引は日歩最低一錢九厘易當に保合ひたり、之れに加ふるに歐米金融市場の狀勢亦月初以來幾分鎮和の預きにあり爲めに久しく不振の酵に流はれる株式界も頓に活氣を帯び石油株、東株、紡績株等何れも著しく騰貴を告げたり、而して中旬に入りては大蔵省證券二千萬圓（日歩一錢八厘）の借換に次ぐ

日本金融経済史研究の発展に寄与することを期待して

——大浦克彦・大阪銀行協会専務理事

この度、我が国金融史研究の代表者、作道洋太郎、岡田和喜、高嶋雅明、本間靖夫の四氏の監修・解説により、大阪銀行協会の前身である大阪同盟銀行集会所（のちに大阪銀行集会所に改組）の編集になる、『銀行報告誌』並びに『大阪銀行通信録』が復刻出版されることは、まことに時宜をえたものといえよう。

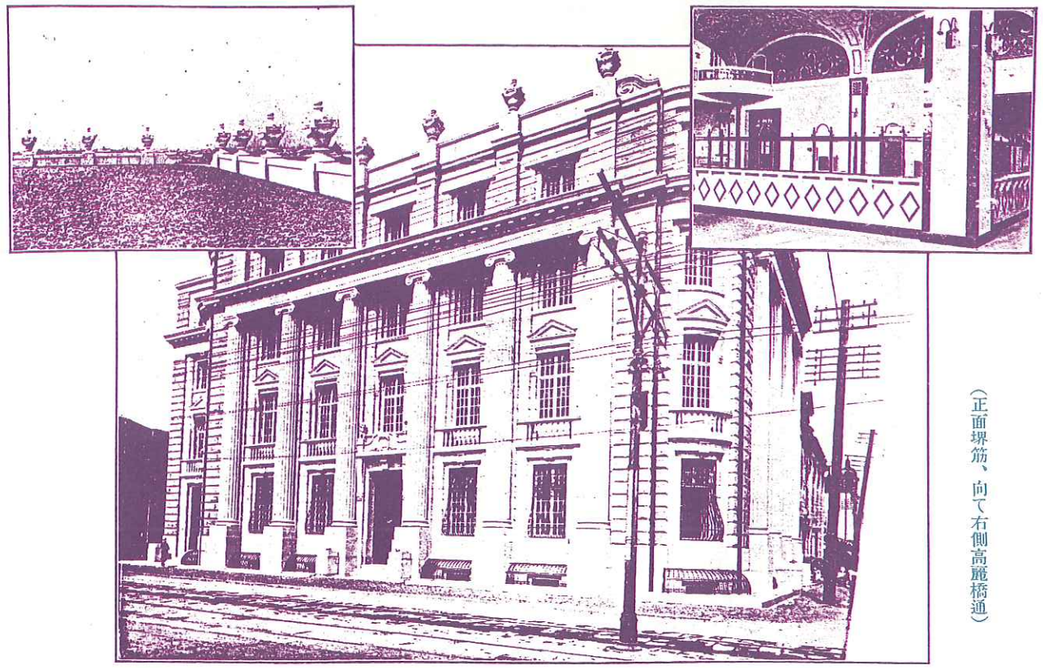
昔時より、天下の台所として栄えた商都大阪は、手形の流通も旺んで、明治一二年には全国に先駆けて手形交換所が設立され、また有力銀行による金利協定を成立させるなど、日本銀行大阪支店を中心に、在阪有力銀行の活動は独自の金融市場を形成し、大阪を中心とする関西地域の経済・金融動向は、全国的にみても極めて重要な地位を占めていた。

大阪同盟銀行集会所編『銀行報告誌』は明治二三年三月に創刊され九二号まで発刊、明治三〇年一一月より大阪銀行集会所編『大阪銀行通信録』と改題、その後金融団体統制令によって廃刊を余儀なくされるに至った昭和一七年八月第五四〇号まで刊行された。両誌合わせて六三二号を数える。

『銀行報告誌』並びに『大阪銀行通信録』には、地域内の産業、金融についての情報が細事に亘り記載されているだけでなく、論説、著名人の演説のほか、調査レポートには全国レベルの財政・経済・金融に関するものが少なくない。

本資料の活用を通じて関西金融経済史ひいては近代日本金融経済史の研究が一層深められることを期待したい。

この度の復刻刊行には、多大の労力と期間が予想されるが、本資料の斯界における意義を了とされ、各位のご理解とご支援とをお願いする次第である。



（正面堺筋、向て右側高麗橋通）

新築の三井銀行大阪支店

◉東北銀行設立の計畫

青森、秋田、宮城、岩手、山形、福島地方に於ける金融の圓滑を圖り東北開發の實を擧ぐるを手初として東北各銀行の親銀行とも云ふべき資本金千萬圓の株式組織銀行を設立し東京に本店を置き東北各地樞要都市に支店出張所を設くるの計畫あり、宮城商業銀行頭取清野喜平次氏等奔走中にして今春四月山形市に開催せらるべき奥羽同盟銀行總會に提議せらるゝならんと

◉平塚銀行の增資

神奈川縣中郡平塚町の平塚銀行は一月十九日の總會に於て從來十五萬圓の資本金を四十萬圓に增加し舊株一株に新株一株を割當て殘額十萬圓を公衆より募集する事に可決せり

◉興業貯蓄銀行の設立計畫

當市の柳廣藏和歌山の廣田善八氏外數名の發起にて和歌山市に資本金五十萬圓を以て興業貯蓄銀行を起さんとの計畫あり目下發起人及び贊成者の勸誘中なりと

◉下野興業銀行の設立

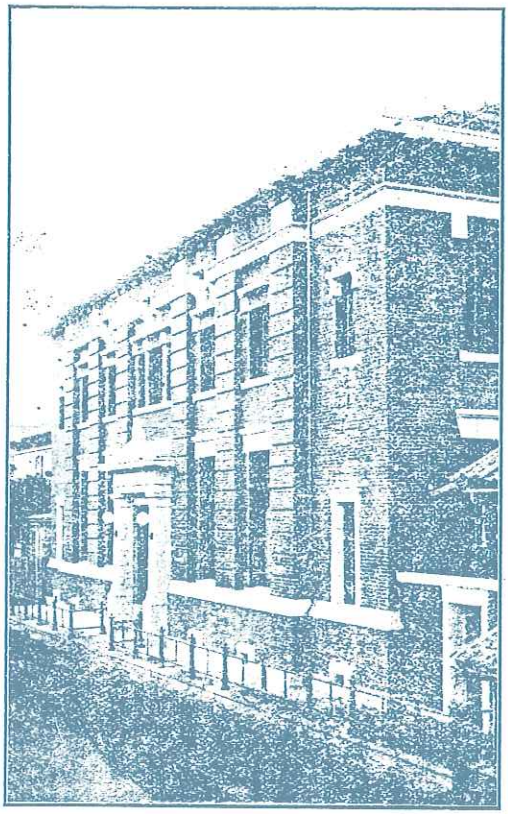
資本金六十萬圓の下野興業銀行の設立計畫せられ一月二十日第一回拂込を終り同二十二日發起人會を開きたり來る二月九日創立總會を開き役員選擧其他の事項を議す可く營業方針は低利長期貸付及不動産貸付等なりと

◉水橋銀行の破綻

富山縣水橋町の水橋銀行（資本金十五萬圓內拂込十三萬圓）にては過般破綻せし水橋商船會社に資金を流用し居れること發覺し昨年十二月二十七日突然支拂を停止したるが一月二十一日に至り頭取早川權次郎、取締役佐々木平兵衛、佐々木久太郎、相川平三郎、監査役相澤勘次郎外二名は富山地方裁判所より横領及び文書僞造の廉にて拘引せられ銀行の缺損額約二十萬圓と噂せらる

◉中越貯金銀行の臨時休業

長岡市の中越貯金銀行にては一月四日より二週間休業を發表したるが監査役の談に據れば同行は資本金十五萬圓の全額拂込なるに缺損金三十八萬圓に達したれば取締役四名に責任を重んじて十萬圓を出資し株金十五萬圓を合して二十五萬圓とし十三萬圓の不足は銀行現在の所有家屋等を賣却して補塡するの方針なりと



新築第一銀行釜山支店

◉山陽貯蓄銀行の休業延期

昨年來整理休業中なる廣島市の山陽貯蓄銀行は過般當地の藤本清兵衛氏商店に於て整理の囑託を受け調査中なりしが都合により絕緣し更に岩谷銀行と交渉中なりしが双方重役の意見不一致の結果是亦示談破裂したるを以て今回債權者會を開き委員十四名選擧の上整理續行を必要なりとし來る二月二十日迄休業を延期したりと

◉百九銀行の整理未了

大分縣佐伯町の百九銀行は蔗厩三日整理の爲め臨時休業を發表したるが其後未だ整理成立するに至らず委員十名を選擧して專ら畫策中なるが先づ委員を上京せしめて二月の利益を見し重なる原因は不正手形二十一萬圓に對し二分の日歩として約五千圓の損害あり尙取附に遊ひたる百五萬圓餘の直輸三厘と見積りて四千圓公債有價證券下落の損害六千三百餘圓あり營業は極めて順潮にして約五萬圓の利益ありしも前期の如く不時の損害を蒙れるより斯く配當の減少を見たるものなり

◉伊勢銀行事件の終結

去る明治四十二年七月津農商銀行と合併解散したる津市の株式會社伊勢銀行には先之同四十一年五月突然帳簿整理を名とし臨時休業を發表したるが當時同行の大株主柴田善右衛門氏は一般株主側の輿望に依つて同行の整理委員に擧げられ鋭意調査の結果頭取海野謙次郎以下の重役並に行員に對する貸金表、同總擔保品不足調、同差引計算書なるものを作成して株主一同に發表したるに一般株主は重役を引退せしめ更に柴田氏を專務取締役に選擧して舊重役並に行員の非行調査に當らしむることゝせり、茲に於て柴田氏は自ら舊重役並に行員の行爲を調査すると共に一方長男の善繼氏をして同銀行に付き檢査役選任の申請を爲さしめんとしつゝある矢先同地の伊勢新聞は當時の安濃津地方裁判所檢事正寺島久松氏（現時大阪控訴院檢事）を彈劾せんとする矢先寺島檢事正は柴田善右衛門氏を七人訴追したるが其一は安濃津地方裁判所豫審判事に於て免判に於て無罪を言渡し其三は名古屋控訴院に於て其四五は既に於て其六七は東京控訴院に於て孰れも無罪を言渡され正問に疑獄と見做されたる伊勢銀行事件は昨年末に至りてとして檢査役選任の必要を認めず云々と記載し次で同四十

◉手形事件と被害銀行の總會報告

する被害銀行中愛知銀行にては一月二十日開催の總會席上本を報告し尙ほ目下交渉中の三井物産より回答あるを俟ちるべしと述べ又四日市銀行にては一月十七日の總會席上の報告を爲し承認を經たりと

さ交渉したるに三井は一切裁判結了の後にあらざれば何分合へたり朝日新聞の記事の如くんば甚だ結構なるも三井の決定し居らぬ模樣なれば自分は更に十七日上京交渉を行

◉起業銀行事件の豫審終結

起業銀行專務取締役代議士平井熊三郎、同取締役前代議士木村雷吾、眞宗信徒生命保險會社專務取締役府會議員村岡角太郎の三名に係る商法違反、背任、横領、文書僞造行使詐欺等の被告事件は京都地方裁判所大賓豫審判事の係りにて豫審中なりしが昨年十二月二十八日終結何れも有罪の決定を受け直に同所の公判に廻はされたり

大阪銀行通信録（大正期）全55巻

◉復刻版概要

体裁等――B5判・上製・総29、798頁
本体価格――全55巻990、000円
（継続刊行予定）
昭和期 全59巻 予定本体価格1、140、000円
『大阪銀行通信録 総目次』――全巻完結後刊行予定

監修・解説
作道洋太郎・大阪大学名誉教授
岡田和喜・日本大学教授
高嶋雅明・和歌山大学教授
本間靖夫・千葉商科大学教授
（解説は適宜、巻頭に付きます）

◉大正期配本予定（第1回～第12回配本は、明治期分を収録しています。）

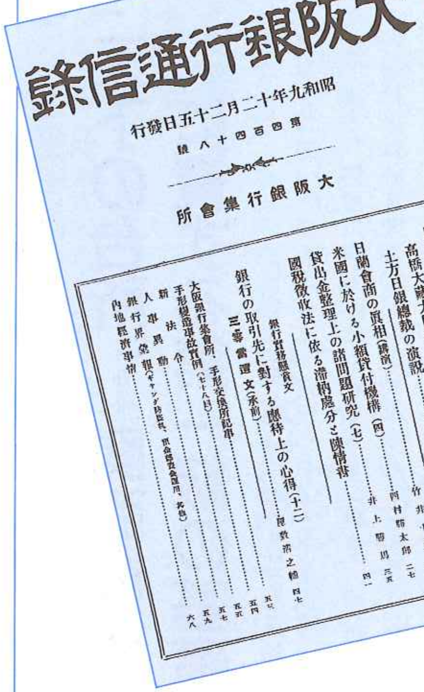
配本	復刻版刊数	原本収録年月	頁数	刊行年月	本体価格	配本年度	年度揃価
第13回	第61巻～第65巻	大2・1～大3・3	2、270	'95年5月	90、000円	'95年度分	270、000円
第14回	第66巻～第70巻	大3・4～大4・6	2、862	'95年9月	90、000円		
第15回	第71巻～第75巻	大4・7～大5・9	2、804	'96年1月	90、000円		
第16回	第76巻～第80巻	大5・10～大6・12	2、886	'96年5月	90、000円	'96年度分	270、000円
第17回	第81巻～第85巻	大7・1～大8・3	2、630	'96年9月	90、000円		
第18回	第86巻～第90巻	大8・4～大9・6	2、392	'97年1月	90、000円		
第19回	第91巻～第95巻	大9・7～大10・9	2、306	'97年5月	90、000円	'97年度分	270、000円
第20回	第96巻～第100巻	大10・10～大11・12	3、066	'97年9月	90、000円		
第21回	第101巻～第105巻	大12・1～大13・3	2、754	'98年1月	90、000円		
第22回	第106巻～第110巻	大13・4～大14・6	2、720	'98年5月	90、000円	'98年度分	180、000円
第23回	第111巻～第115巻	大14・7～大15・9	3、108	'98年9月	90、000円		

（以下、昭和期刊行に続きます）

本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

不二出版
東京都文京区向丘一―二―一二
TEL ○三―三八一二―四四三三
FAX ○三―三八一二―四四六四
振替 ○○一六○―二―九四○八四

※弊社は注文制です。お近くの書店へご注文ください。


大阪銀行通信録

昭和九年十二月二十五日發行
第四百四十八號

大阪銀行集會所

關西銀行大會に於ける
高橋大藏大臣の演説
土方日銀總裁の演説
日蘭會商の眞相（講演）……竹井十郎
米國に於ける小額貸付機構（四）……西村翫太郎
貸出金整理上の諸問題研究（七）……井上繁門
國税徴收法に依る滯納處分と陳情書
銀行實務懸賞文
銀行の取引先に對する應待上の心得（十二）……段數濟之輔
三等當選文（承前）
大阪銀行集會所、手形交換所記事
手形交換事故實例
新法令
人事異動
銀行界彙報
內地經濟事情

★『大阪銀行通信録』（前身誌『銀行報告誌』を含む）は、全国的視野にたつ金融経済の状況をもとに、特に大阪金融市場を中心とする関西の諸地域、及び西日本各地の金融経済の動向を把握できる第一級の資料。東京の『銀行通信録』（復刻刊行済）、名古屋の『中央銀行会通信録』（弊社にて復刻刊行済）と共に、日本金融史研究に不可欠の三大重要資料の復刻版である！

——不二出版

監修・解説——作道洋太郎・岡田 和喜・高嶋 雅明・本間 靖夫

大阪銀行通信録

（誌名の変遷）『銀行報告誌』第1号（明治23年3月）→第92号（明治30年8月）

『大阪銀行通信録』第1号（明治30年11月）→第540号（昭和17年8月）

●昭和期 全59巻・別冊1

体裁等——B5判・上製本・総34、914頁

配本——1999年1月→2002年9月・全12回配本

本体揃価格——1、140、000円

推薦——宮本又次・長 幸男・安岡重明・大浦克彦

◉『大阪銀行通信録』推薦の辞

「天下の台所」――関西経済の研究に資する第一級の基礎資料

――宮本又次・日本学士院会員・大阪大学名誉教授・故人

関西経済はいま発展の新しい時期を迎えている。こうしたとき、明治中期から昭和戦中期に至る五十年余にわたる第一級の金融経済資料『銀行報告誌』ならびに『大阪銀行通信録』が復刻されることは慶賀のかぎりである。

大阪は江戸時代に「天下の台所」として流通・金融センターの役割を果たし、明治以後の経済近代化の過程においても、産業革命の中心地となり、流通組織や金融制度の新しい体系を創り出してきた。

『銀行報告誌』(明治二三年三月～明治三〇年八月)、『大阪銀行通信録』(明治三〇年一一月～昭和一七年八月)には、大阪の動向だけではなく、関西の諸地域についても近代金融市場の形成過程を明らかにしており、さらに西日本各地の状況もつたえている。東京の『銀行通信録』、名古屋の『中央銀行会通信録』と同様に貴重な研究資料である。これらの三つの主要な地域における金融史資料を総合的に研究することによって、近代日本経済の歴史像が明らかにされることになるであろう。

したがって、本資料は関西および西日本の金融情報を中心とした経済資料を収録しており、その資料的価値は高いものということができる。関西経済の明日の課題に対応するためにも、本資料のなかから歴史の経験や教訓を読み取ることができるように思う。大学等研究機関ばかりではなく、金融業界等経済界においても広く利用されることが期待される。

◉内容見本(縮小しています)

大阪銀行通信録 第一號

大阪銀行集會所設立の來歴

第一國立銀行頭取澁澤榮一氏の首唱に依り明治十一年六月九日第三十二國立銀行に於て在阪の銀行者十八名が相謀りて社委的の協議會を開きしは即ち大阪同盟銀行の濫觴にして其以來十有九年間の星霜と共に程々の變遷を經て本年まで繼續したる大阪同盟銀行集會所は九月十六日の總會を以て都合に依り一旦解散することとなりしより之に代りて銀行當事者が時々相會し互に交誼を厚ふし且は各自營業上の利害得失を講究する一の集會所設立の必要は銀行者一般の希望なれば此希望を充さんが爲め同盟銀行集會所解散後間もなく第一第三第五第三十二三十四第四十二第百三十第百四十八三井三菱鴻池住友帝國商業北濱等の諸銀行は先つ進んで發起銀行となり專ら勸誘斡旋の勞を執り遂に發起銀行を合せて總計六十七行の賛成者を得茲に本年十月五日の創立總會を以て當大阪銀行集會所の設立を見るに至れり

創立總會

本年十月五日午後第四時より大阪ホテルに於て當銀行集會所の設立に關する協議會を開く會する者五十六行衆望に依り第一銀行支店熊谷辰太郎氏議長席に就き起艸委員より提出せる規程草案を原案とし逐條審議遂に脩正確定せり依て同月十一日に於て更に委員撰擧會を開く可き事を定め全く議事を了りたるは午後八時なりき

委員撰擧會

前回の約を履み十一日午后第五時より大阪ホテルに於て委員選擧會を開く會するもの六十四行にして前回の例に倣ひ復た熊谷辰太郎氏を議長に推選し茲に始めて委員選擧の手續に移りしに其選擧せられたる者は

株式會社第一銀行大阪支店　熊谷辰太郎
株式會社大阪貯蓄銀行　外山脩造
第百三十國立銀行　松本誠宣
三菱合資會社大阪支店銀行部　江口定條
住友銀行　田邊貞吉

近畿地方の金融市場に関する広汎な統計と情報を提供

――長幸男・東京外国語大学名誉教授

昭和三六年に完結した『日本金融史資料・明治大正編』全二五巻はその頃の研究者にとって離すことのできない資料庫であった。しかし、個々の銀行や各地域の金融の実態を把握するには充分とはいえない。わが国の金融機構の形成と動態を、ナショナルな視野から包括的に把えることが、編集の主眼であったからである。同『資料』は第六巻を「明治時代の銀行に関する雑誌」にあて、東京銀行集会所機関誌『銀行通信録』を収録し、その(附)として『大阪銀行通信録』を載せている。しかし、前者は、全国にわたる各銀行の動向や金利変動等を編者の方針で「銀行要録」と題して再編し、かつ主だった論説等を選択摘録したものである。後者に至っては、大阪地方の特殊な記事を若干収録したにとどまり、資料としては不充分で、『大阪銀行通信録』の銀行雑誌としての片鱗をうかがうにすぎない。

今日の金融史研究では、各銀行の内部資料による経営分析や、地域の信用ネットワークの分析などが、金融情勢や金融政策の考察と結びつきながら、緻密な作業によって追求されている。本復刻はそのような研究の前線で精励する人々の必要にこたえるものである。

大阪はいうまでもなく幕藩体制下における全国的商品流通の中心であり、大名・商人から庶民にいたる両替・為替・貸借等の信用制度がもっとも発達した地域である。明治以降政治の中枢が東京に移り、公私経済の中心も亦京浜地帯に形成されていったとはいえ、大阪を中心とする近畿一帯が、その伝統的基盤を踏まえて、わが国の金融市場で独自の卓越した地位を占め、近畿型の一大商工業地帯を育成し、近代的な信用制度の展開に重要な役割を果したことは多言を要しない。

したがって、浩瀚な本書の完全復刻は、大阪を中心とした近畿地方の諸銀行・金融市場に関する広汎な統計・情報を提供し、所収の幾多の論説なども夫々の時期の市場解析を助け、従来の研究を一層推進する有力な土台となろう。

大阪銀行通信録

昭和十七年八月號

第五百四十號

大阪銀行集會所發行　封漢　印人

續・高等常識(一)……荒木秀一一
熱帯生活の心得(三)……東亜經濟調査局四
南方共榮圏の資源(三)……松本清九
銀行事務擔當能率の增進(四)……海野耕平二四
戰爭と海運(十)(講演)……平井好一二九
近畿地方の金融市況……二四
人事異動……二四
銀行界彙報……二五
金融市況……二八
經濟諸表……三三

廢刊の辭

本誌は明治三十年創刊以來、專ら實業主義を以て廣く一般銀行員の實務上及教養上の好參考、好伴侶たらんことに努力して來たのであつた。即ち銀行實務の檢討改善、海外銀行實務の紹介、內地銀行實務改善の懸賞募集等は本誌の傳統的に重點を置き來つた處であつた。此故を以て幸に本誌は各位の愛讀を受け、發行部數は毎月三千部內外に上つてゐた。茲に一般銀行界の本誌に對する期待と要求との大なるものありしを認めらるる。

然るに今回全國金融統制會によつて新雜誌の發行が企劃せられ、當所の調査事務及雜誌發行も同會に統合せらるゝこととなつたので、茲に第五百四十號を以て本誌も廢刊することとなつたのである。

廢刊に際して、本誌の內容の充實育成に多大の助力を加へ來られし銀行界の諸先輩、研究寄稿に心血をそそがれし寄稿家諸賢、多年の熱心なる愛讀者各位に對し深甚なる謝意を表す。

より深化されたレベルでの日本経済発達史の解明に有効

——安岡重明・同志社大学教授

東京の『銀行通信録』、名古屋の『中央銀行会通信録』の刊行と並行して、大阪の『大阪銀行通信録』（その前身誌『銀行報告誌』を含む）が復刻、刊行される。まことに喜ばしいことである。『大阪銀行通信録』の期間は、明治二三年から昭和一七年までの約半世紀であり、それは日本の近代産業の確立・発展期であった。

周知のように関西は古来、政治経済の中心地であり、とりわけ大阪は江戸期には、経済金融の中枢であった。その大阪が明治以降、どのように活動したかを解明することは、重要な課題である。また民間レベルでの日本経済の近代化は大阪の綿糸紡績業が先頭に立って、押し進められた。だから大阪や関西の金融事情の解明は、一層進化されたレベルで日本経済の発達史を再構築するために必要であり、地域内の産業・金融についての情報ばかりでなく、全国的な論説や調査レポートを含んだこの『大阪銀行通信録』の利用は、それを可能にするだろう。

明治三十一年十一月三十日發兌
大阪銀行通信録
第十三號
毎月一回發行
（非賣品）

日本金融経済史研究の発展に寄与することを期待して

——大浦克彦・前大阪銀行協会専務理事

この度、我が国金融史研究の代表者、作道洋太郎、岡田和喜、高嶋雅明、本間靖夫の四氏の監修・解説により、大阪銀行協会の前身である大阪同盟銀行集会所（のちに大阪銀行集会所に改組）の編集になる、『銀行報告誌』並びに『大阪銀行通信録』が復刻出版されることは、まことに時宜をえたものといえよう。

昔時より、天下の台所として栄えた商都大阪は、手形の流通も旺んで、明治一二年には全国に先駆けて手形交換所が設立され、また有力銀行による金利協定を成立させるなど、日本銀行大阪支店を中心に、在阪有力銀行の活動は独自の金融市場を形成し、大阪を中心とする関西地域の経済・金融動向は、全国的にみても極めて重要な地位を占めていた。

大阪同盟銀行集会所編『銀行報告誌』は明治二三年三月に創刊され九二号まで発刊、明治三〇年一一月より大阪銀行集会所編『大阪銀行通信録』と改題、その後金融団体統制令によって廃刊を余儀なくされるに至った昭和一七年八月第五四〇号まで刊行された。両誌合わせて六三二号を数える。

『銀行報告誌』並びに『大阪銀行通信録』には、地域内の産業、金融についての情報が細事に亘り記載されているだけでなく、論説、著名人の演説のほか、調査レポートには全国レベルの財政・経済・金融に関するものが少なくない。

本資料の活用を通じて関西金融経済史ひいては近代日本金融経済史の研究が一層深められることを期待したい。

この度の復刻刊行には、多大の労力と期間が予想されるが、本資料の斯界における意義を了とされ、各位のご理解とご支援とをお願いする次第である。

昭和四年七月發行
海外銀行界彙報
大阪銀行通信録第三百八十三號

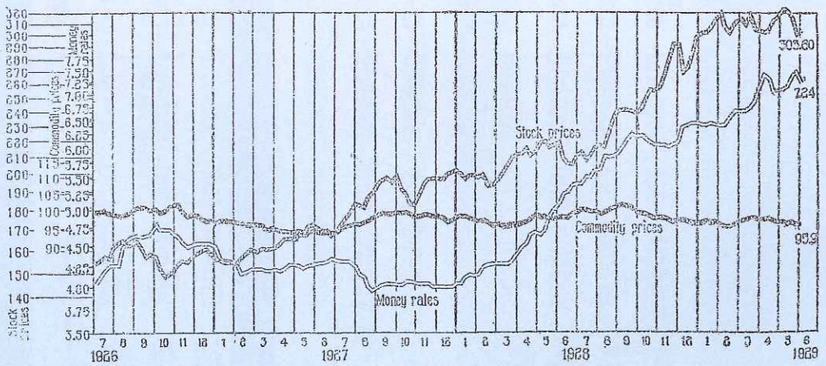
◇最近の米國經濟界（五月—六月）

五月中の金融市場は前月に引續き非常な緊張を見せ、金利は莫大なる金の輸入ありしに拘らず尚四月中よりは高く、四月中漸く騰りかけてゐた證券相場は再び低落し初め六月に入つてからは其の傾向は更に著しくなつた。又株價は月央以後敏感に動搖し指數は四月より幾分下降氣味であつた。

五月中準備制度に就いて特筆すべきことは、桑港準備銀行の利上を最後として十二準備銀行の再割利率が一律に五％となつたことである。然し準備銀行中には今や六％引上説を唱ふるものがあり、其の要求に對しては準備制度諮問委員中にも賛意を表してゐるものもあるから早晩利上を見るではあらうが未だ實現さるゝまでには至らない。だが當今では金利は大抵再割利率を遙かに上廻つてゐるのであるから、再割利率を六％に引上げたとて外部の金利に及ぼす影響は案外少いかも知れない。

次に仲買人が得意先に對して資金を融通するのに際しこれまで高い手數料を徴收して來たことは見逃し難い二つの重要なる結果を招來した。其の一はこれまで仲買人に融通を仰いでゐた得意先は其の負債を減少するために銀行に預けてゐた預金を引出す樣になつたこと、其の二は銀行に預金を有するものは仲買人などから融通を受けるのを止めて其の有する證券を擔保に銀行から直接貸付を受ける樣になつたことである。これに就いては銀行家側も善良なる得意先に對しては貸出を拒むことは事實上不可能だと稱してゐる。從つてこんな貸付のために加盟銀行は矢鱈に手持手形の額を增加する。所がこの種の貸出は非常に安全ではあるが、直には返濟され得ない固定貸付に類するものであるから、これ

最近の米國財界圖表



Stock prices（株價線）
Commodity prices（物價線）
Money rates（金利線）

本圖表の株價線は工業株の一週間平均相場にしてドウ・ジョーンの數字によるもの、物價線は一九二六年を100とした物價指數、金利線は定期貸利率及び一流商手割引利率を基礎とするものでハーバード經濟調査會の調べによる。

大阪銀行通信録（昭和期）全59巻・別冊1

◉復刻版概要

体裁等――B5判・上製・総34、914頁

本体価格――全59巻＋別冊1　1、140、000円

別冊――『大阪銀行通信録　総目次』［別冊のみ分売可］
B5判・約400頁・分売価格＝5、000円＋税

監修・解説
- 作道洋太郎・大阪大学／大阪国際大学名誉教授
- 岡田和喜・日本大学教授
- 高嶋雅明・和歌山大学教授
- 本間靖夫・千葉商科大学教授

（解説は適宜、巻頭に付きます）

◉昭和期配本予定

（第1回～第12回配本は明治期分を、第13回～第23回は大正期分を収録しています。）

配本	復刻版刊数	原本収録年月	頁数	刊行年月	本体価格	配本年度	年度揃価
第24回	第116巻～第120巻	大15・10～昭2・12	3、268	'99年1月	95、000円	1998年度分	95、000円
第25回	第121巻～第125巻	昭3・1～昭4・3	3、356	'99年5月	95、000円	1999年度分	285、000円
第26回	第126巻～第130巻	昭4・4～昭5・6	3、436	'99年9月	95、000円		
第27回	第131巻～第135巻	昭5・7～昭6・9	3、152	2000年1月	95、000円		
第28回	第136巻～第140巻	昭6・10～昭7・12	2、988	'00年5月	95、000円	2000年度分	285、000円
第29回	第141巻～第145巻	昭8・1～昭9・3	2、868	'00年9月	95、000円		
第30回	第146巻～第150巻	昭9・4～昭10・6	2、700	'01年1月	95、000円		
第31回	第151巻～第155巻	昭10・7～昭11・9	2、822	'01年5月	95、000円	2001年度分	285、000円
第32回	第156巻～第160巻	昭11・10～昭12・12	2、726	'01年9月	95、000円		
第33回	第161巻～第165巻	昭13・1～昭14・8	2、532	'02年1月	95、000円		
第34回	第166巻～第170巻	昭14・9～昭16・4	2、172	'02年5月	95、000円	2002年度分	190、000円
第35回	第171巻～第174巻＋別冊（全巻総目次）	昭16・5～昭17・8	1、894	'02年9月	95、000円		

表示価格は全て税別

不二出版
東京都文京区向丘一―二―一二
TEL ○三―三八一二―四四三三
FAX ○三―三八一二―四四六四
振替 ○○一六○―二―九四○八四